石　川　遺　跡

（昭和61年度押切南地点発掘概報）

1987

清水市教育委員会

序　　文

私達の生活は、長い歴史の上に成り立っており、これを解明してくれるのが古墳や遺跡であります。

先人の残してくれた、これらの文化遺産から私達は、物質的、精神的文化、社会構造など多くのことを学び取る事が出来ます。

遠い昔に想像をたくましくした時、現代の複雑な社会に生きる者にとって、学問的知識と共に、いいしれぬ夢と安らぎを与えてくれます。

この度石川地内の土地区画整理事業に伴う、発掘調査を行った結果、旧河川跡や土器片の出土により学術的に貴重な資料を得ることが出来ました。

本書を発刊するにあたり、多数の皆様に古代史研究の資料として、また、文化財愛護の資料として、ご活用戴ける事を願っております。

おわりに調査報告書の作成にあたりご指導、ご協力を戴いた関係者の皆様に対し、心から感謝申しあげます。

昭和62年3月31日

清水市教育委員会
教育長　又平　明

例　　言

1. 本書は、昭和61年度、清水市教育委員会が実施した石川遺跡（押切南地点）の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、大川敬夫、新井正樹（清水市教育委員会）が実施した。
3. 資料整理は、大川、新井が、遠藤紀子、佐藤裕子、豊田復子、鹿野和子、久木桃絵、内山富美子の協力を得て行なった。
4. 本書の執筆は、大川敬夫が担当し、清水市押切石川遺跡の土層の地質学的検討（続）については、静岡大学農学部・加藤芳朗教授にお願いして、本書に収めた。
5. イヌ頭蓋骨については、東京国立科学博物館動物第一研究室・吉行瑞子主任研究官のご指導を得た。
6. 発掘調査にあたっては、静清広域都市計画事業、清水市押切南土地区画整理事業組合、同理事長・宮田武司氏をはじめ、土地所有者の方々の文化財保護に対する深いご理解と調査に対する協力が得られた。深く感謝の意を表したい。
7. 調査の資料は全て清水市教育委員会に保管されている。
8. 本調査に関する事務は全て清水市教育委員会社会教育課職員がおこなった。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　地形及び周辺遺跡 …… 2
Ⅲ　発掘調査の概要 …… 2
　1.　調査区の設定 …… 2
　2.　調査の経過 …… 2
Ⅳ　層位の観察及び遺物の出土状態 …… 5
Ⅴ　自然地形 …… 6
Ⅵ　出土遺物 …… 6
　1.　土　　器 …… 6
　2.　木製品 …… 17
　3.　骨製品 …… 17
　4.　獣　　骨 …… 17
Ⅶ　まとめ …… 17

付　載　　清水市押切石川遺跡の土層の地質学的検討（続）…… 18

挿　図　目　次

第１図　石川遺跡位置図 …… 1

第２図　石川遺跡調査区配置図 …… 3

第３図　石川遺跡土層図 …… 7

第４図　石川遺跡出土土器実測図（1） …… 9

第５図　石川遺跡出土土器実測図（2） …… 10

第６図　石川遺跡出土土器実測図（3） …… 11

第７図　石川遺跡出土土器実測図（4） …… 12

第８図　石川遺跡出土土器実測図（5） …… 13

第９図　石川遺跡出土土器実測図（6） …… 14

第10図　石川遺跡出土土器実測図（7） …… 15

第11図　石川遺跡出土木製品・獣骨実測図 …… 16

図 版 目 次

図版第1　A　石川遺跡近景
　　B　石川遺跡第1地区

図版第2　A　石川遺跡第2地区
　　B　土器出土状態

図版第3　A　土器出土状態
　　B　土器出土状態
　　C　土器出土状態
　　D　土器出土状態

図版第4　A　犬頭蓋骨出土状態
　　B　獣骨出土状態
　　C　獣骨出土状態

図版第5　A　旧河道内出土土器
　　B　旧河道内出土土器
　　C　旧河道内出土土器
　　D　旧河道内出土土器
　　E　旧河道内出土土器

図版第6　A　旧河道内出土土器
　　B　旧河道内出土土器
　　C　旧河道内出土土器
　　D　旧河道内出土土器

図版第7　A　旧河道内出土土器
　　B　旧河道内出土土器

図版第8　A　旧河道内出土土器
　　B　旧河道内出土土器

図版第9　A　旧河道内出土土器
　　B　旧河道内出土土器
　　C　旧河道内出土土器

図版第10　A　イヌ頭蓋骨　上面　側面　頭蓋底

Ⅰ　調査に至る経過

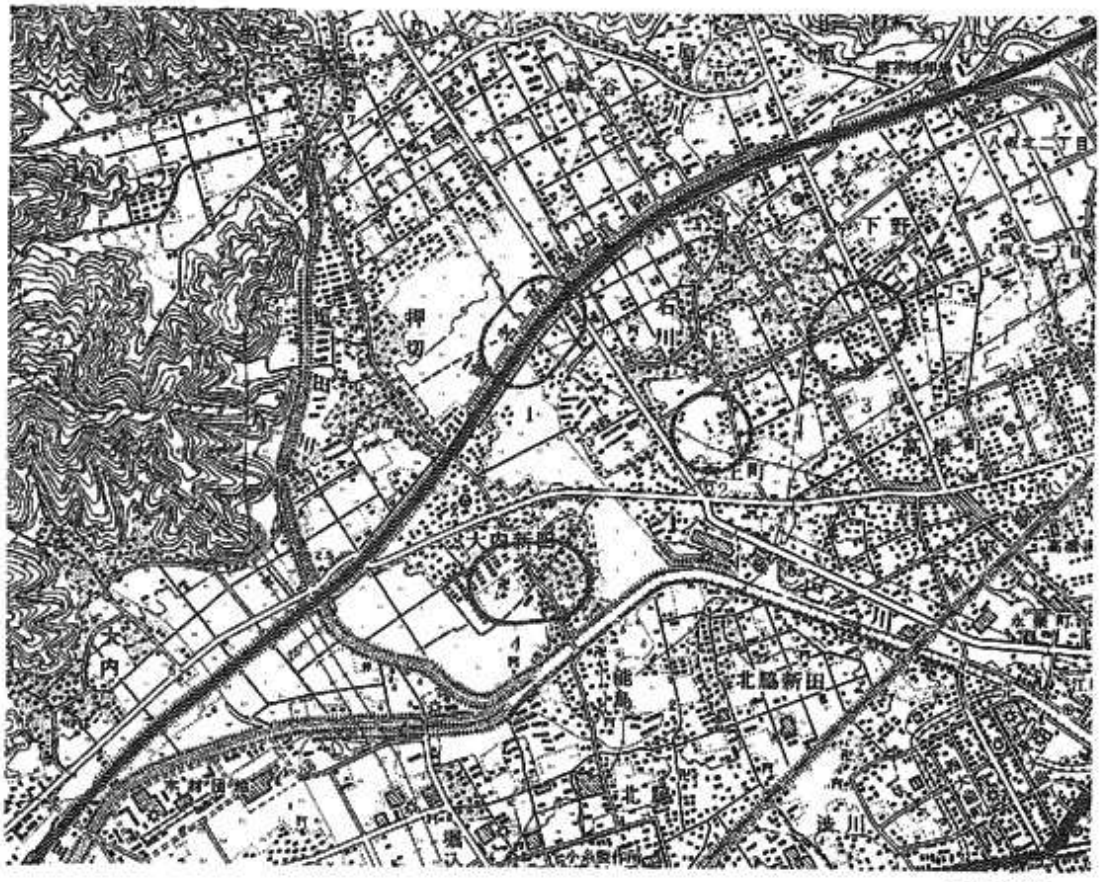
石川遺跡は、昭和40年、東名高速道路建設に当り発掘調査が行なわれた。この調査の結果、住居跡や弥生土器・土師器・須恵器が出土した他、灼骨・鉄斧・木製品なども確認され、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺跡の一端が明らかにされた。

今回の調査地点は、昭和40年の調査地点の南西にあたる位置にある。この地域には昭和59年、静清広域都市計画事業清水押切南土地区画整理事業が計画され、昭和61年度より一部の工事が着工されることになった。このため昭和60年、国の補助事業としてこの地域の遺跡確認調査が実施された。

この調査は区画整理予定地内に4ケ所の調査地点を設けて行なわれた。調査方法は10m方形のグリット3個と5m方形のグリット1個を設定して行なった。

遺跡確認調査の結果、第2グリット（北西に設定したグリット）の表土下3m付近より弥生土器片・灰釉陶器片・山茶碗片などが出土し、この付近に何らかの遺跡の存在が確認された。

今回の調査は、この確認された遺跡の性格をより具体的に把握するため、グリットNo.2付近で平面調査を実施した。



1. 石川遺跡　2. 飯田遺跡　3. 下野遺跡　4. 能島遺跡

1：25,000
この地図は国土地理院発行地形図清水を使用したものである。

第1図　石川遺跡位置図

II　地形及び周辺遺跡

清水市は北に南アルプスの南縁にあたる庵原山地がそびえ、南に日本平で名高い有度丘陵がある。清水平野はこれらに挟まれた位置にあり、中央部には西から東に向って勾配のゆるやかな巴川が流れている。巴川には北、南の両丘陵から流れ込むいくつもの小河川がある。これら小河川の流出した砂や礫、それに古折戸湾から運ばれた砂礫により形成されたいくつかの扇状地や自然堤防がみられる。

清水平野の遺跡は扇状地や自然堤防上に立地するものが多く、石川遺跡もこの微高地に存在する。

今回の調査地域はこれら微高地の南西の端に当り、東側を北東から南西へ和田川が、西側を北から南へ向って宅町田川が流れ、調査地域の南側で合流し、和田川となって巴川へ流入する。

今回の調査地域はこれら2本の河川に挟まれた地域内の西側に当る。調査地の北東約300mにはすでに東名高速道路建設にともない発掘調査された石川遺跡がある。この遺跡からは弥生時代〜古墳時代にかけての住居跡・弥生土器・土師器・須恵器・灼骨・鉄斧・木製品などが発見されている。

調査地東側500m付近には弥生時代後期〜古墳時代にかけての飯田遺跡がある。この遺跡は昭和54年以来、清水市教育委員会により発掘調査が行なわれ、数多くの土坑・円形周溝墓・溝が確認され、弥生土器・土師器・灰釉陶器・土錘・石鏃が出土した。

調査地南側600m付近の微高地上には弥生〜鎌倉時代にかけての能島遺跡がある。この遺跡では方形周溝墓や鎌倉時代の旧河道が確認され、弥生土器・灰釉陶器・山茶埦などが出土している。

また東方約1km付近の低湿地には縄文〜弥生時代にかけての下野遺跡（A・B・C地区）がある。この遺跡は昭和55〜57年にかけて静清バイパス建設にともない発掘調査が行なわれた。その結果B地区では、縄文時代の旧河道が確認され、河道内から縄文土器（後期）・耳栓・漆塗の櫛が出土した。A地区では弥生時代中期の旧河道が確認され、土器・木製品が出土した。C地区でも弥生時代後期〜古墳時代の旧河道が確認され、弥生土器・土師器・木製品・石製品などが出土した。

また、調査地の北方約1.2kmの梅ケ谷には洪積層の独立残丘があり、この丘陵上に鹿島古墳がある。ここはかつて数基の円墳があったとされるが現在は丘陵上に一基痕跡が認められるだけで、出土遺物も神社社殿に横瓶が1点確認されているのみである。

III　発掘調査の概要

1. 調査区の設定

昭和60年の確認調査により、調査対象地内に設定した4個のグリットのうち、グリット№2より出土し、旧河道状の遺構も発見された。また付近からはカワゴ平パミス、大沢スコリアなども検出され旧河道状の遺構の性格の判明とともに、これら火山灰層との関係も問題となった。

今回の調査では北西に設けたグリット№2を中心に、8m×30mの調査区を約40m間隔で2本設けた。調査区の名称は北側を第1地区、南側を第2地区とした。

2. 調査の経過

石川遺跡は、昭和40年東名高速道路建設に当って発掘調査が行なわれた地点の南西側に当る。

第2図　石川遺跡調査区配置図

昭和59年この地域に静清広域都市計画事業、清水押切南土地区画整理事業の計画が進められることになり、このため遺跡の範囲を把握するための確認調査が必要となった。調査は昭和60年度に実施し、和田川と壱町田川に囲まれた地域内の北西寄りで、新たに旧河道状の地形が確認された。

調査は6月4日～7月23日までの50日間行なわれた。

6月 4日	安全柵設置。器材搬入。2ヶ所に調査区設定。 北側を第1調査区、南側を第2調査区とする。
6月 5日	第1調査区から重機による表土層の排除を行なう。
6月11日	第1調査区内に水中ポンプ、ベルトコンベアーを設置し、調査を行なう。
6月16日	礫層内の除去に入る。灰釉陶器、山茶埦片などの遺物が出土する。
6月19日	礫層内より、木製曲物の底板、土師器の鍋が出土する。
6月23日	礫層内西側に於いて、犬類の頭骨や他の獣骨が出土する。
6月27日	中央部に於いて骨製品が出土する。礫層を完掘する。 形状は大きくU字状を呈しており、旧河道の床面であることが判明する。
7月 1日	第1地区の実測図の作成と写真撮影を行ない第1地区の調査を終了する。
7月 4日	第2地区調査開始。積土厚く調査困難。旧河道の一部を東側で検出する。
7月11日	静大の加藤芳郎先生により土層調査が行なわれる。
7月16日	第2調査区内で、灰釉陶器・山茶埦片などが出土する。
7月19日	第2調査区の実測図の作成、写真撮影を行なう。
7月23日	器材の搬出を行ない、石川遺跡の調査を終了する。

Ⅳ　層位の観察及び遺物の出土状態

石川遺跡の土層は、旧河道内の覆土も含めて17層に分けられる。

第1層は表土層で、色調は暗褐色を呈し、内部に小礫を含む。確認調査では第2グリット内の1、2層としたものである。

第2層は、淡緑灰色で厚さ22cmを測る。第1、2層は全面には見られず、部分的には削り取られた後、埋土が使われている。

第3層は青灰色粘質砂層で、厚さ54cmを測り、西方から東方へ向って流入している。

第4層は黄灰色粘質土層で、厚さ約28cmを測り、確認調査では第1グリット第3層としたものである。

第5層は灰白色粘質土層で、厚さ約45cmを測り、後世の河道の最下部の覆土である。

第6層は暗青灰色粘質土層で、厚さ約1.9mを測る。上層約80cmは酸化しているため、褐色を呈しているが、同一土層である。

第7層は褐色礫層で、厚さ1.6mを測り、第6層の西側部分にのみ流入したものである。

第8層は暗青灰色礫層で、厚さ76cmを測り、確認調査の第2グリット第Ⅸ層に当る。旧河道の覆土中最下層のもので、弥生土器・土師器・灰釉陶器・山茶埦片などが出土した。

第9層は淡黒色粘質土層で、厚さ約15cmを測り、確認調査時の第1グリット4層に当る。中央を旧河道により切り込まれ、調査区の東西で確認された。

第10層は青灰色粘質土層で、厚さ4cmを測り、確認調査時の第1グリット第5層に当る。

第11層は淡黒褐色粘質土層で、厚さ6cmを測る。

第12層は暗青灰色粘質土層で、厚さ約3cmを測り、第10層と共にほぼ同一の厚さで堆積しており、水害などにより一時的に運ばれたものと思われる。

第13層は黒色粘質土層で、厚さ約18cmを測り、確認調査時の第1グリット第8層と同一の土層である。

第14層は大沢スコリアで厚さ約3cmを測り、一部第6層により切断されているが、調査区の東西に於いてほぼ水平に堆積している。

第15層は黒褐色粘質土層で、厚さ約5cmを測る。部分的には第7層と同様に見える。

第16層はカワゴ平パミスで、淡桃白色を呈し、厚さ2.5cmを測る。大沢スコリア同様水平に堆積しているが、連続せずに部分的に点在している。

第17層は暗黒褐色粘質土層で、厚さ約28cmを測り、内部には植物遺体を含む。

第18層は暗灰白色粘質砂層で、厚さ約22cmを測る。

第19層は灰色砂層で、全てのベースとなるものである。

V 自然地形

旧河道 I

形状は、川幅約25m、深さ約2.6mを測り、老町田川に沿って北から南に平行に流れ、第2調査区付近で大きく東方に蛇行する。

河床は標高1.07m前後で、旧河道内の覆土は2層に分かれる。

最下層の暗青灰色礫層内から弥生土器・土師器・灰釉陶器・山茶埦片が出土している。

VI 出土遺物

出土遺物としては土器片・木製品・骨製品・獣骨などが確認された。これらの遺物はすべて旧河道内から出土したものである。

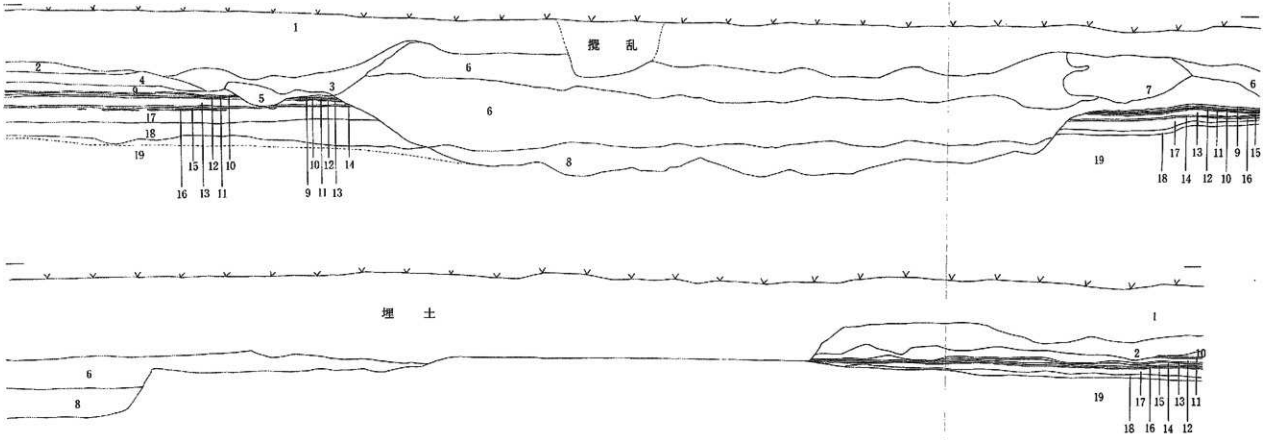
1. 土　　器

1) 弥生土器

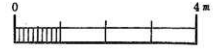
弥生土器で完形なものは一点も見られなかった。出土量も灰釉陶器や山茶埦に比べてかなり少量であり、器種としては壺形土器・甕形土器がみられた。

1～3は折り返し口縁を有する壺形土器で、3は口縁部下位に棒状隆起文が施されている。

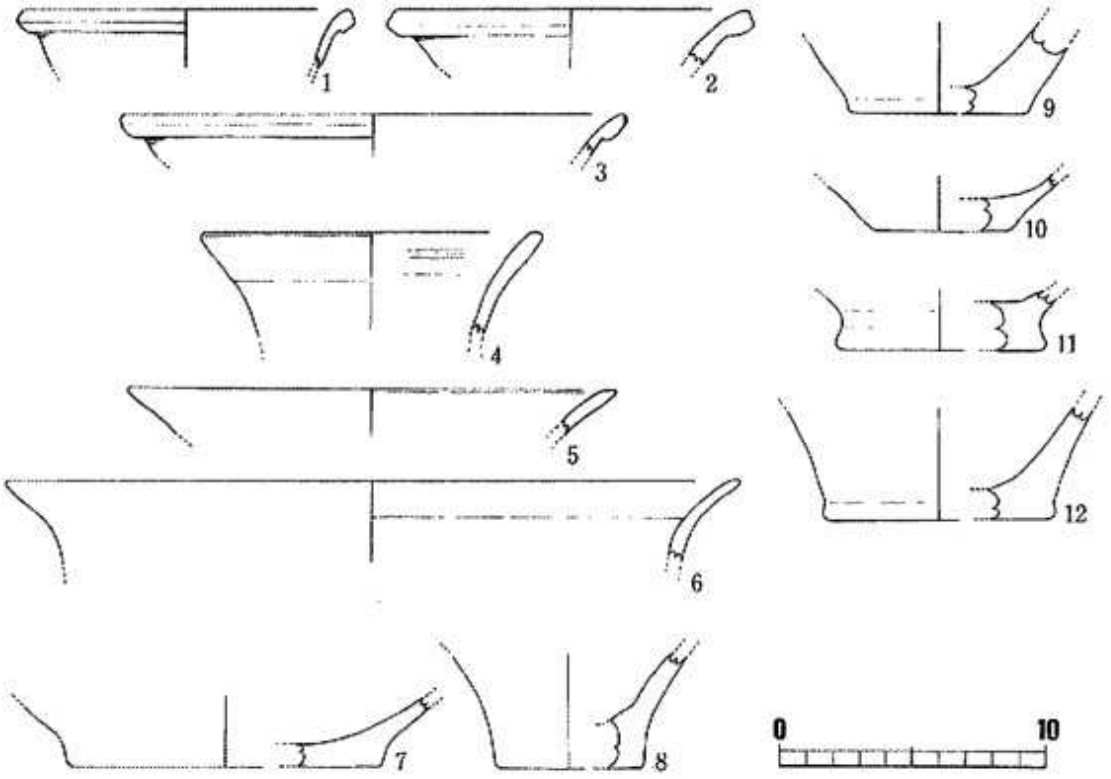
4、5は単純口縁の壺形土器で、4は内面にヨコのハケ整形が施されている。6は甕形土器の口縁部で、口縁端部がやや尖りぎみである。



1. 表土層
2. 淡緑灰色土層
3. 青灰色粘質砂層
4. 黄灰色粘質土層
5. 灰白色粘質土層
6. 暗青灰色粘質土層
7. 褐色礫層
8. 暗青灰色礫層
9. 淡黒色粘質土層
10. 青灰色粘質土層
11. 淡黒褐色粘質土層
12. 暗青灰色粘質土層
13. 黒色柏質土層
14. 大沢スコリア
15. 黒褐色粘質土層
16. カワゴ平パミス
17. 暗黒褐色粘質土層
18. 暗灰白色粘質砂層
19. 灰色砂層



第3図　石川遺跡土層図



第４図　石川遺跡出土土器実測図（１）

7～12は壺形土器か甕形土器の底部片で、底部から上方へ立ちあがり、その後大きく開き胴部へ続くもの（７～11）と底部から斜め上方に開くものとがある。（12）

2）土　師　器

土師器は比較的多く発見された。器種としては、椀、小皿、甕形土器、鍋形土器が見られた。

13～18は椀である。13は胴部にノタメが施され、底部には糸切痕が見られる。14は高台を有しており、灰釉陶器をうつしたものである。17は口縁部が内側に折り返され、18は外面にノタメが施されている。

19～21は小皿である。19は完形で外面に沈線が施され、底部には糸切痕が見られる。20、21は口縁端部が平らに整形されている。

22～34は椀、小皿の底部で、高台の付くもの（22～24）と高台のないもの（25～34）とがある。

35～43は甕形土器である。36、37は口縁部が「く」の字状に付けられ、39、40は緩やかに外反する。43は口縁部が上方に引き上げられたものである。

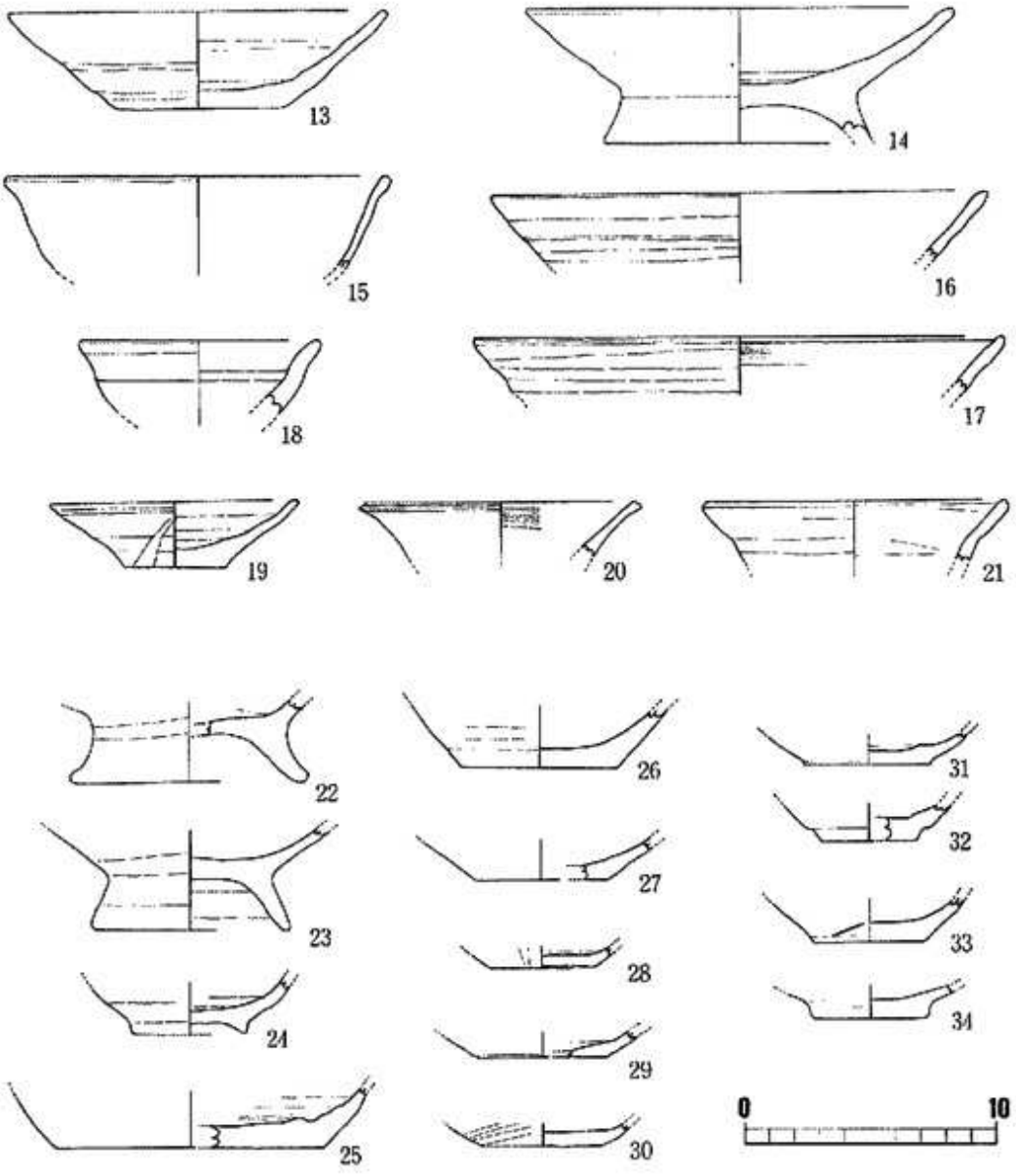
44は鍋形土器で、口縁端部は指頭によりつまみ出されており、伊勢型のものである。

3）須　恵　器

須恵器はわずか３点が確認された。

45は坏身で推定口径7.9cmを測り、受部はやや斜め上方に引きあげられ、立ちあがりと受部との間には明瞭な沈線がめぐる。

46、47は比較的低い高台を有する坏身である。



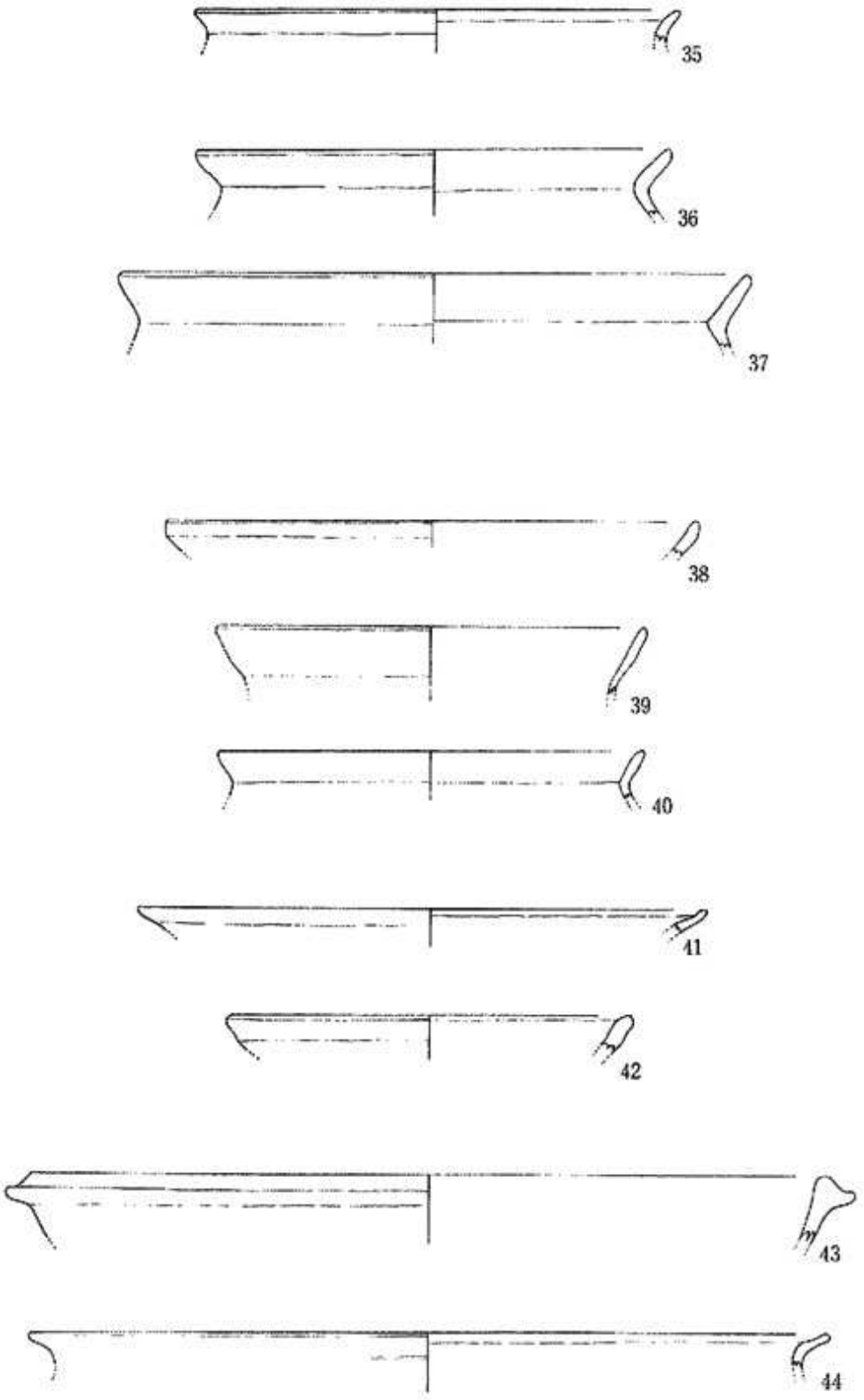
第5図　石川遺跡出土土器実測図（2）

4）灰釉陶器・山茶椀

灰釉陶器・山茶椀片は出土遺物の大半をしめる。

48～58は灰釉陶器の大椀の口縁部である。これには口縁部が外側に引き出されるもの（48～55）と上方に引き出されるもの（56～58）とがある。48、50、51は口縁端部が丸くなり、49、52～57は口縁部が細く引き出される。また48、50、51、56、58にはノタメが施されている。

59～78は椀の口縁部である。これには口縁部が外に大きく引き出されるもの（59～65）、口縁端部がわずかに外に引き出されるもの（66～71）、口縁部が直線的に斜め上方に引き出されるもの（72～78）とがある。59は輪花の痕跡を残し、62、64、66、67、70にはノタメが施されている。

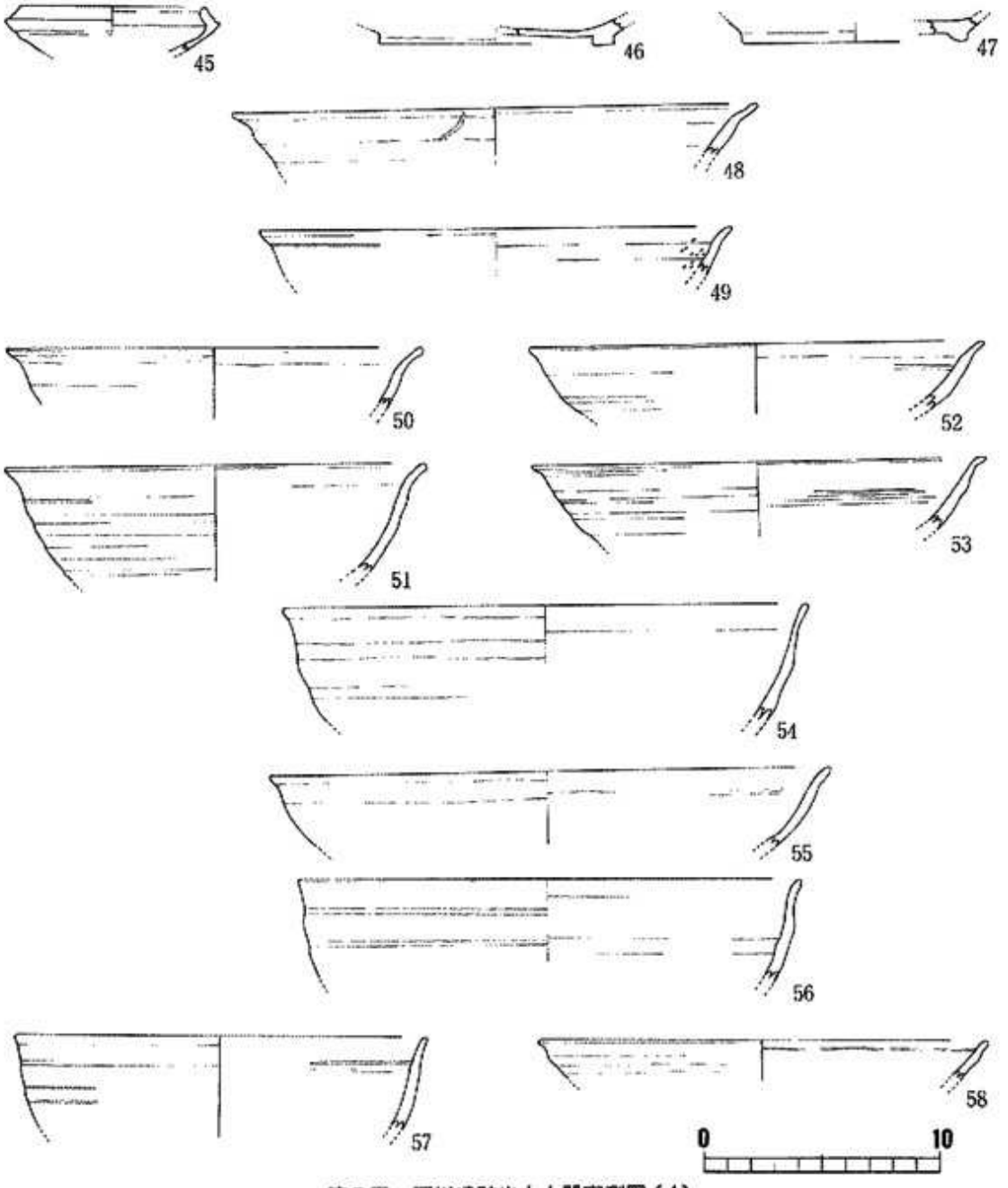


第6図　石川遺跡出土土器実測図（3）　0　10

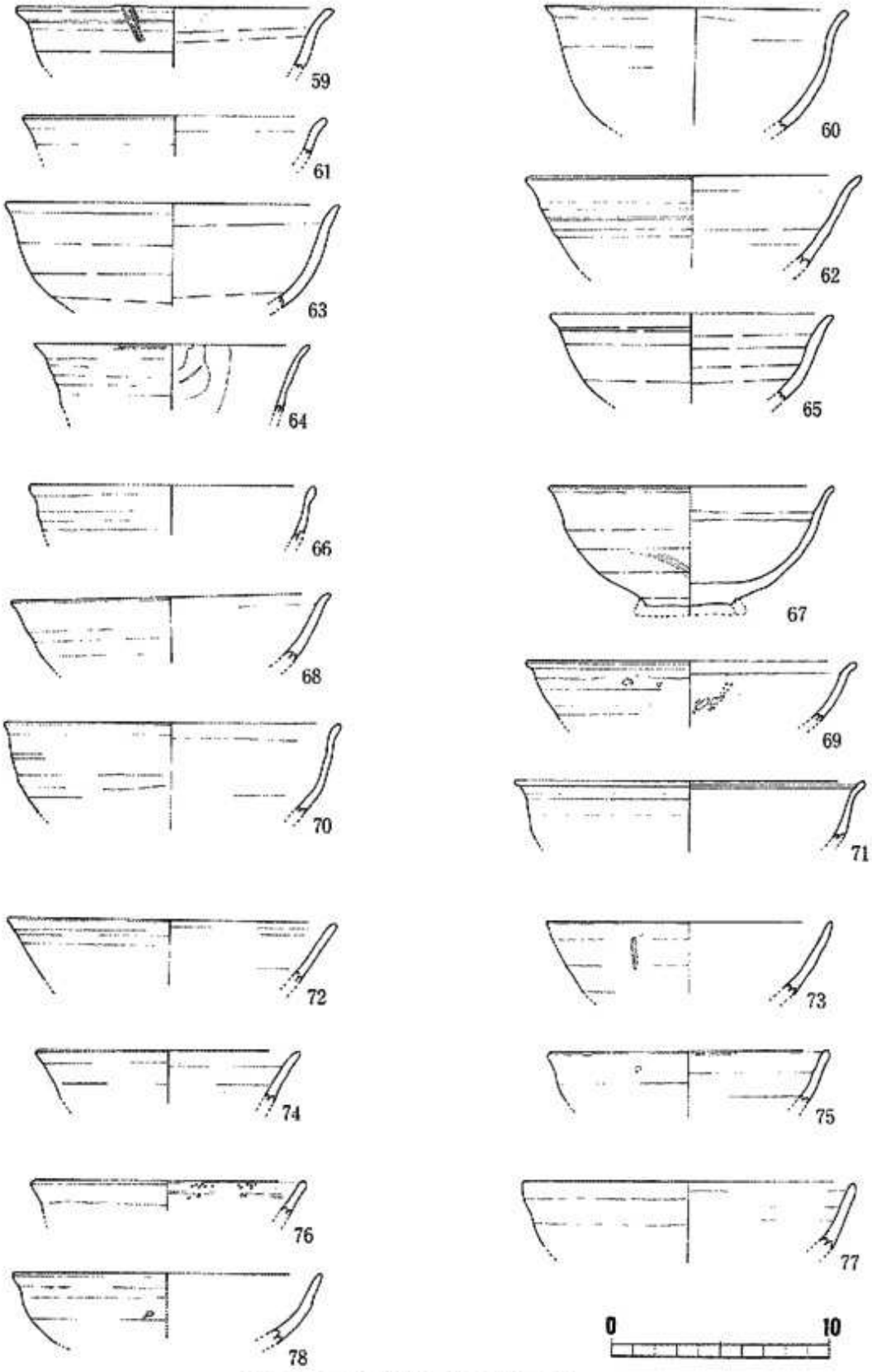
79～90は小塊小皿である。79には櫛花の痕跡が見られ、87、88にはノタメが見られる。83は内外面に釉が見られ、81、85～87は内面に釉が施されている。

91～126は灰釉陶器・山茶埦の底部である。底部はその形により5つに分けることができる。

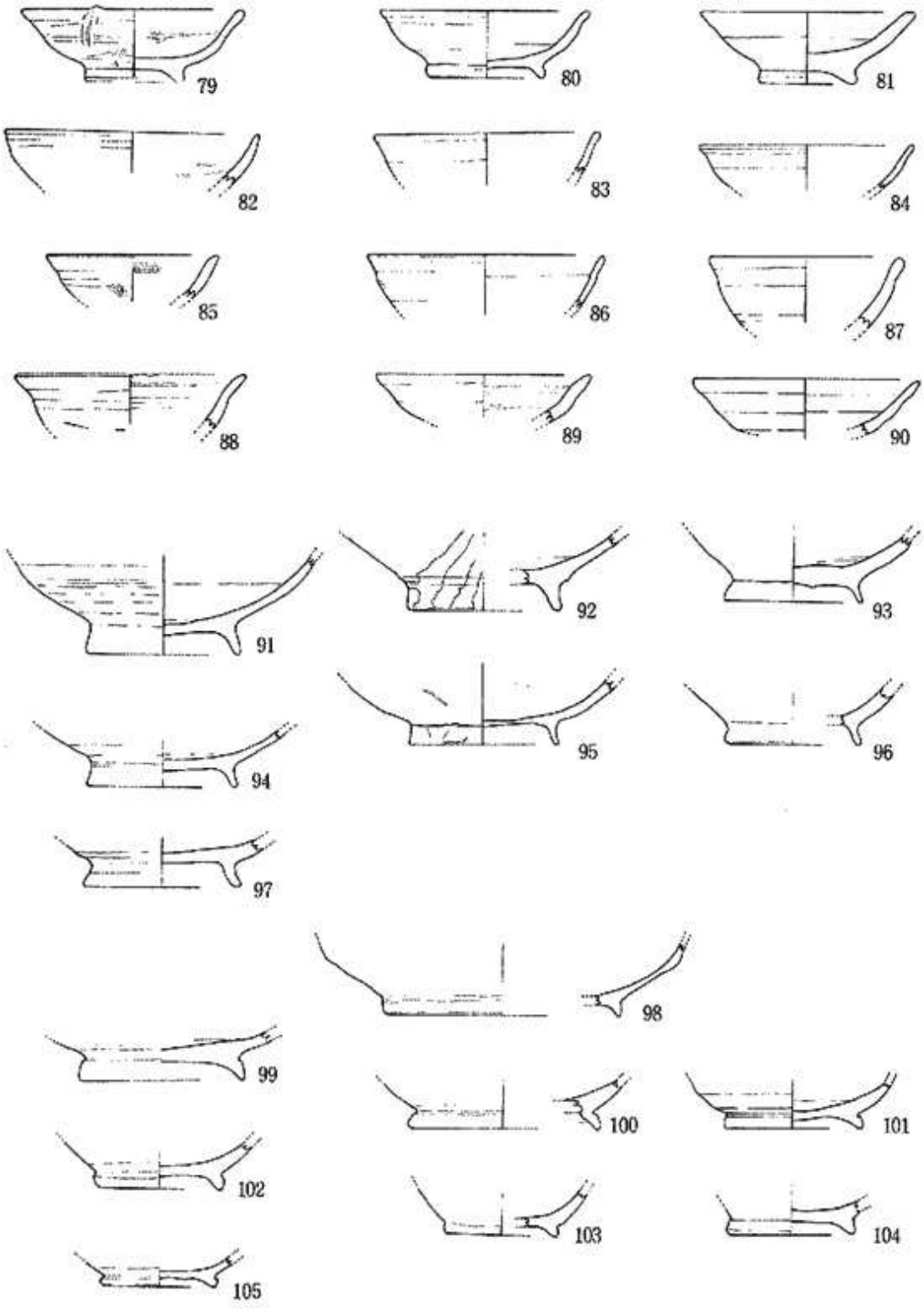
Ⅰ.高台が比較的高いもの。（91～97） Ⅱ.外面の高台部と底部の境が明瞭になっており、高台内側の接合部分が斜めに整形されているもの。（98～105） Ⅲ.高台端が底部の高台の付け根より外側に引き出され、高台内側の接合部分は斜めに整形されるもの。（106～113） Ⅳ.高台の断面が三角形を呈し、高台内側の接合部分が斜めに整形されるもの。（114～122） Ⅴ.高台の断面形が長方形で、



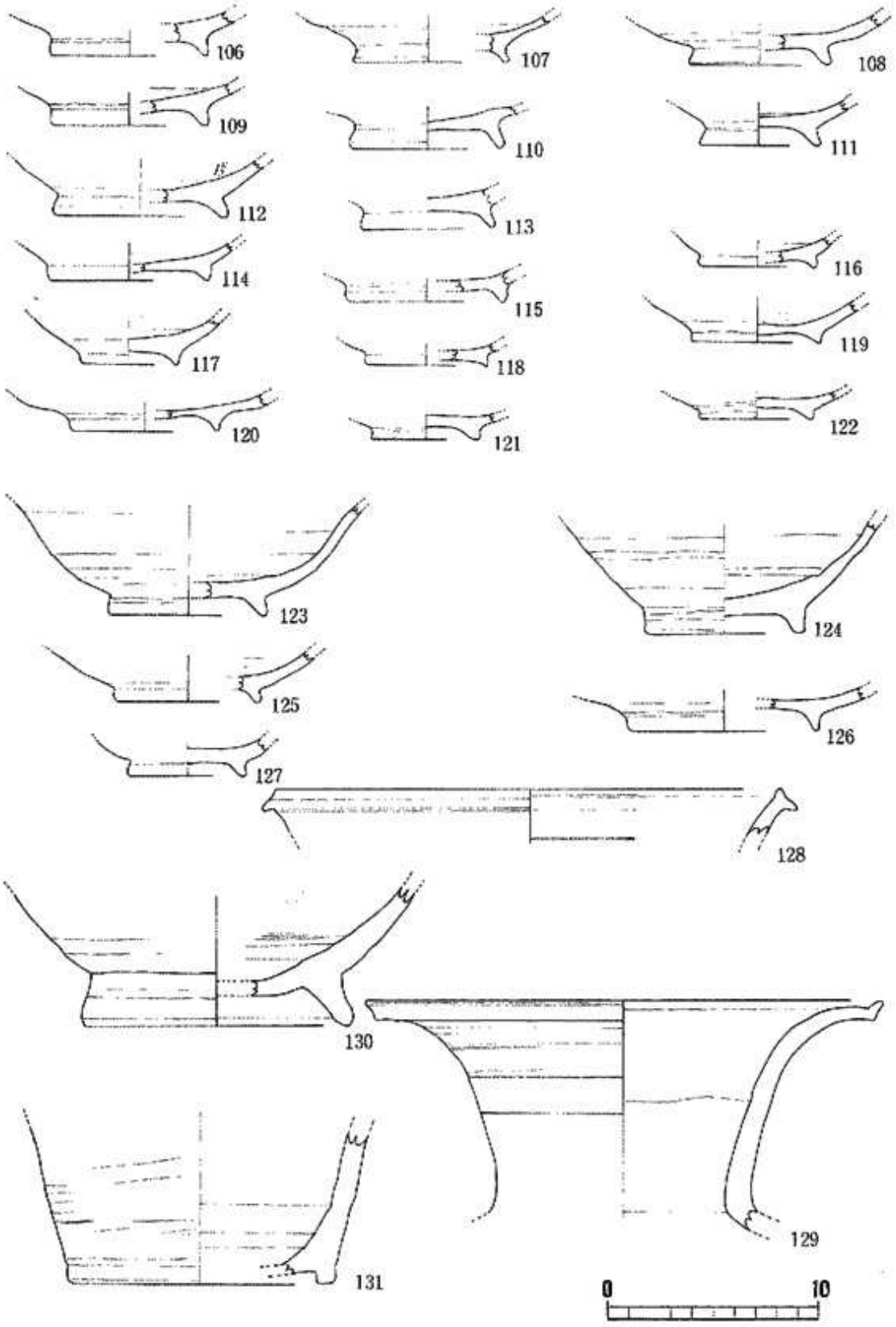
第7図　石川遺跡出土土器実測図（4）



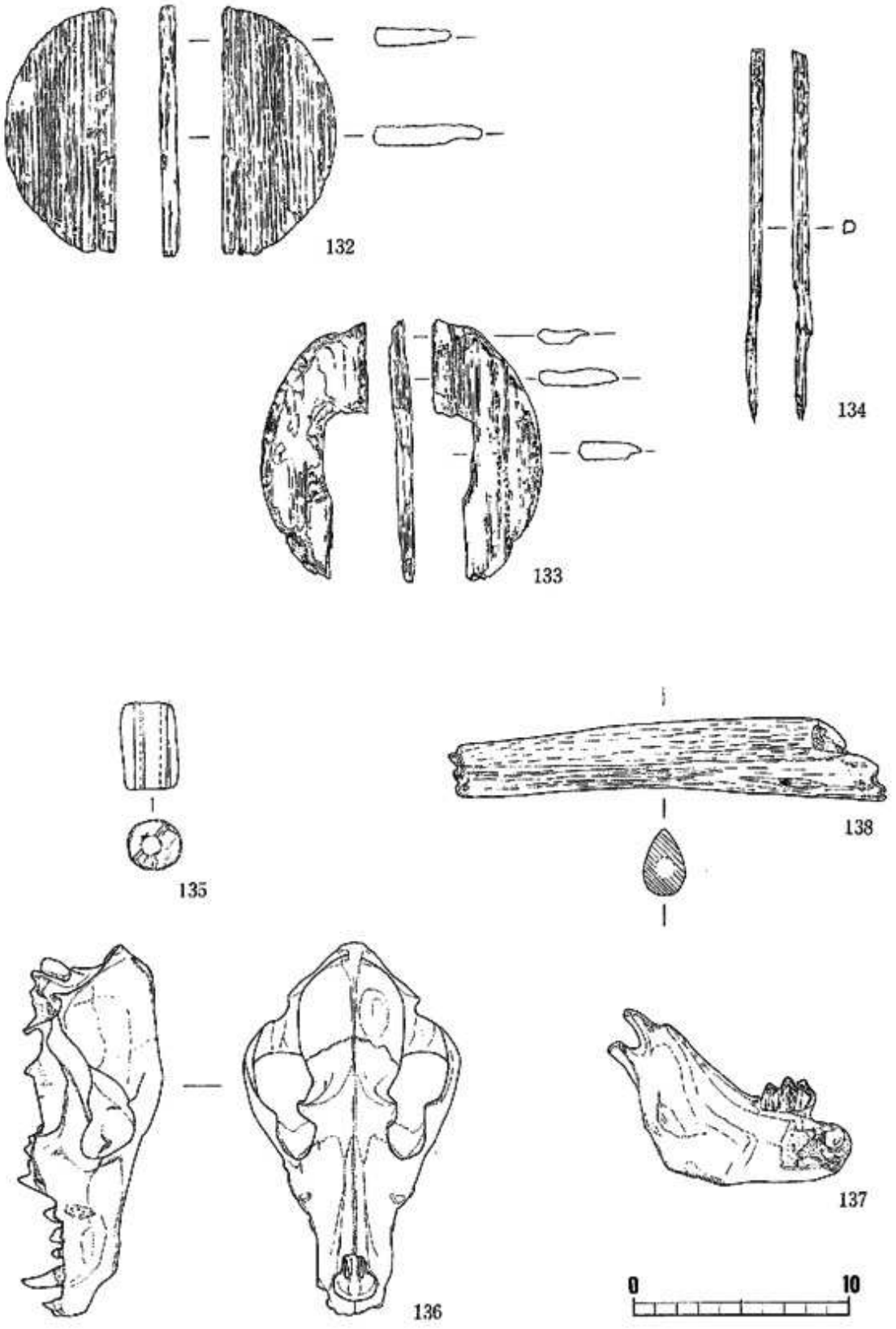
第８図　石川遺跡出土土器実測図（５）



第9図　石川遺跡出土土器実測図（6）



第10図　石川遺跡出土土器実測図（7）



第11図　石川遺跡出土木製品・獣骨実測図

胎土が荒く造りも雑なもの。（ 123～127 ）

94は静止糸切が見られ、102、109、120、121には糸切痕がある。また110～113、115、117、119、122、127は糸切後に高台の周囲を削り磨いたものである。123、124にはノタメが施され、94、112、123、124には重ね焼の痕跡がある。

5）陶　　器

陶器類は4点のみ出土した。128は推定口径24.1cmで、口縁部を平らにし、内側を丸め外側を引き出す形で、上方の平坦面には沈線が施され、色調は灰色である。129は口径21.8cmの壺の口縁で、口縁端部は上方に引き出され、口縁外側は平らとなる。130は推定高台径13.0cmを測り、色調は茶色である。131は高台部が破損されているが、壺か甕の底部で色調は灰色を呈す。

2. 木　製　品

1）曲　　物（ 132、133 ）

132は径11.6cm、厚さ0.7cm前後を測り、形状は半円形を呈す。表面は丁寧に整形され、一端には小孔が施されている。133は径12.4cm、厚さ0.8cm前後を測り、形状は一端のふくらんだ三ケ月を呈す。

2）箸（ 134 ）

現長17.5cm、厚さ0.5cm前後を測り、形状は四角柱で、一方の先端が細くなる。

3. 骨　製　品

柱状骨製品（ 135 ）

八角柱の骨製品で、八角の各面は丁寧に整形されているが、角稜は明瞭でない。

4. 獣　　骨

1）イヌ頭蓋骨（食肉目・イヌ科・イヌ属）（ 136 ）

頭蓋骨が単独で出土したものである。歯牙はすでに6本失っているが、神経孔は三つみられ、裂肉歯・犬歯はオオカミより小さい。

2）その他の獣骨（ 137、138 ）

骨格が全てそろうものではなく、骨が単独で埋没したものである。そのため保存状態は良くない。

Ⅶ　ま　と　め

出土遺物のうち旧河道の形成を決定するものは土師器・灰釉陶器・山茶埦である。

このうち灰釉陶器、山茶埦は、前述のように5つに分けることができる。初めのものは百代寺ごろの時期に考えることができよう。また第8図 70 ・第9図 80については鹿指古窯跡群21号窯のものである。最後のものについては高台の造りがかなり雑で、太田切遺跡、飯田遺跡にも見られ、鎌倉時代初めごろのものと思われる。

この結果から旧河道は平安時代末～鎌倉時代初頭に流れていたものと思われる。

今後、この上流にこの時期の遺跡が存在することが考えられ、それらについても明確にして行く必要があろう。

付載1

清水市押切石川遺跡の土層の地質学的検討（続）

加　藤　芳　朗（静岡大学農学部）

1. まえがき

昭和60年度にひきつづき、本年度おこなわれた第1、2調査区（以下1、2区と略称）の土層について地質学的に検討したので、前回の知見（加藤、1986）とあわせて報告する。

2. 壱町田川の旧川筋の復元

前回の調査で、壱町田川、和田川ぞいに、川筋がえぐれ、その中に背後の山地から押出した垂角れきが充塡堆積したと推定されたが、今回の調査でも壱町田川のそれが検出され、図1のような旧流路（れきの分布帯）が浮かびあがってきた。前回の予想と反して、旧流路が蛇行する様子がうかがわれる。

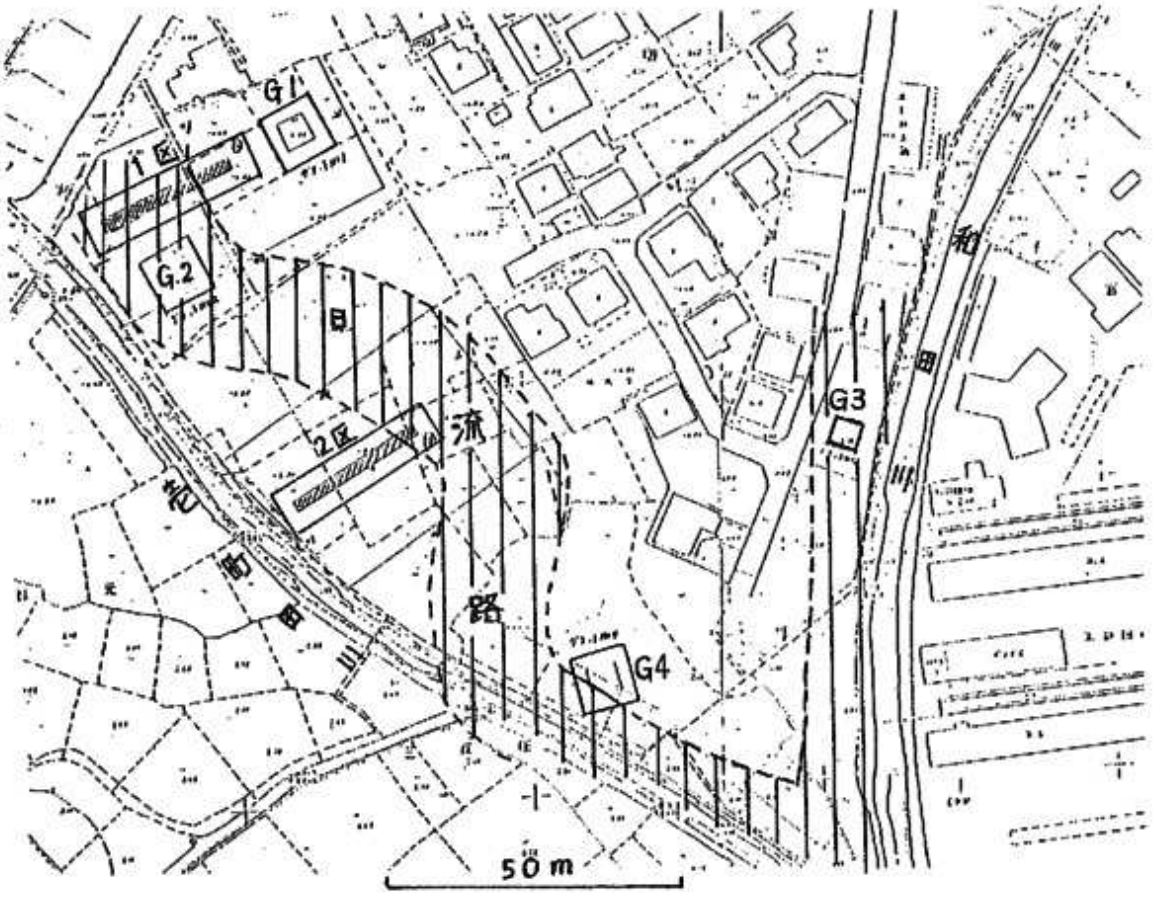


図1　古壱町田川の流路の復元

1区では、中央あたりで、区を横断する溝とその充填堆積層が認められた。同層の最下部は主として砂岩からなる亜角れき層で、その下底には溝の外側の粘土層と同じものが塊のまま含まれる。この粘土塊は、溝を掘りこんだ古壱町田川の激流によってえぐりとられて、れきとともに運ばれ堆積したものと思われる。この層内のクロスラミナ（傾いた層状の構造、傾きの方向と水流のそれが一致する）の傾きから推定された水流の向き（３ケ所で測定）は、いずれも南東向きであり、溝の伸びる方向とほぼ同じである。

和田川については、今回新しい知見は得られなかった。

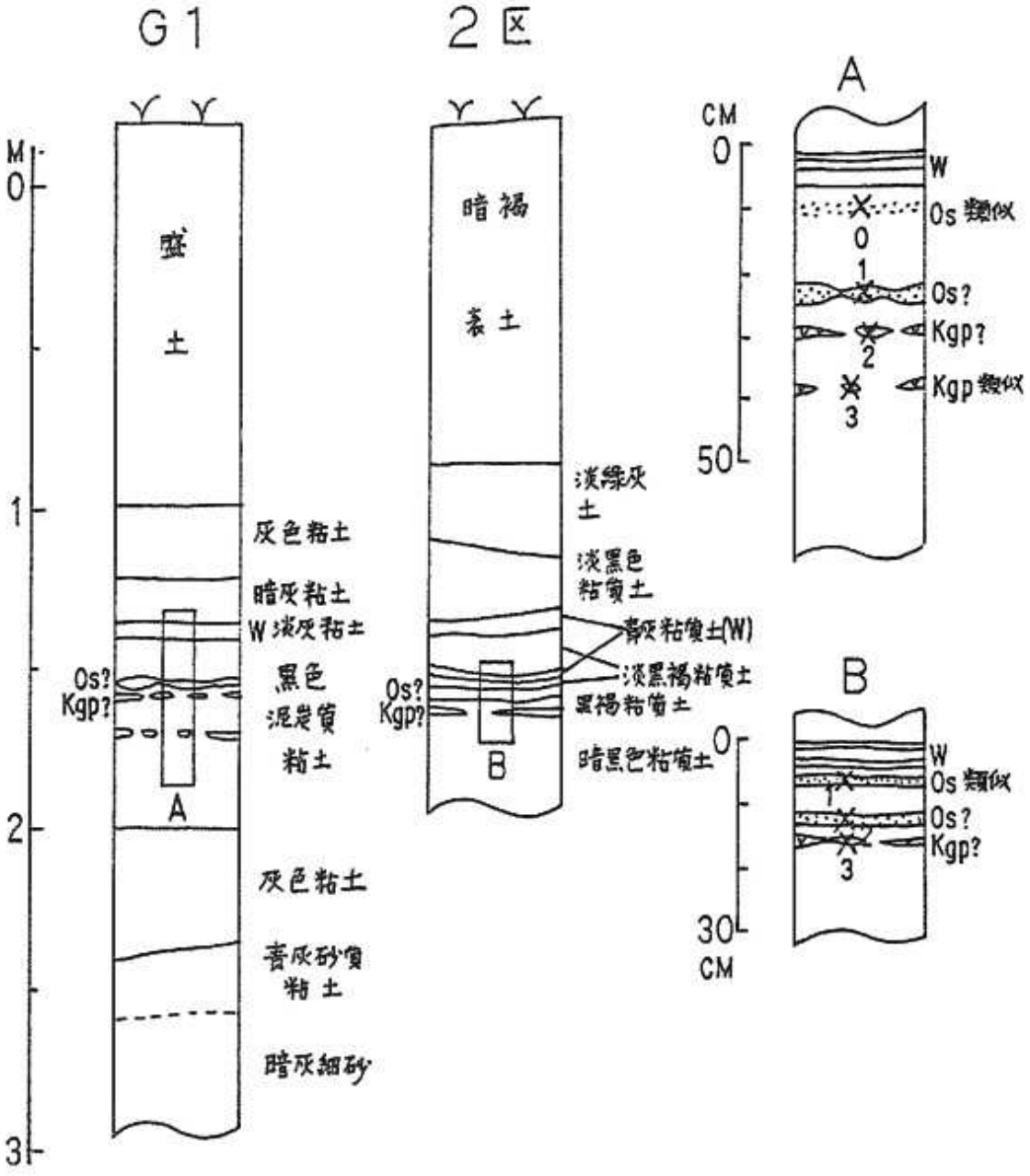


図２　土層柱状図

3. 火山灰層

今回も大沢スコリア、カワゴ平軽石らしい火山灰層（以下Os? Kgp? と略称）だけでなく、さらに、別の火山灰層が存在することが明らかになった。前回のG１のそれらとともに、粒径分析、鉱物分析を行った。

（1）火山灰層の産状

G１（前回）、２区（今回）の、火山灰を含む断面の土層柱状図を図２に示す。（１区は２区とほとんど同じなので省略）

火山灰層は、いずれの断面でも、黒色粘土～泥炭質黒色粘土層（以下黒色粘土と略称）中に複数の薄層＊として（厚さ1～2cm）、水平に断続して含まれる。その層準は、黒色粘土の上部の、水平によく連続する２枚の淡青灰色粘土層（W、厚さ1～2cm）の直下を占める。＊G１で４枚、１、２区で３枚。

G１の４枚は、上から、イ．白色微粒散在帯（Os? 類似）、ロ．暗褐色火山砂（Os?）、直上に白色粒散在帯を伴う。ハ．黄灰色火山砂（Kgp?）、ニ．黄灰色火山砂（ハに似る、塊がとぎれとぎれに並ぶ）である。２区の３枚は、上から、イ．暗褐色細粒火山砂（Os? 類似）、ロ．暗褐色火山砂（Os?）、直上に白色粒散在帯を伴う。ハ．黄灰色火山砂（Kgp?）である。いずれも、ロの方がハよりも厚く、連続性がよい。イはロと似るが、ロより薄く、かつ、細粒である。

（2）室内分析結果

(a) 粒径分析　2mm以下の風乾細土10gを音波処理にかけて土粒子を砕いた後に、ふるいを使って、2～0.2mm（CS、粗砂）、0.2～0.02mm（FS、細砂）の画分にわけ、おのおのを秤量した。その結果を表１に示した。なお、参考のために、長崎新田遺跡の試料の分も併記した。

表１　砂画分の含量（風乾細土 10g中、%）

	試　料	全 砂（TS）	粗 砂（CS）	細 砂（FS）	CS/FS	備　考
石川遺跡	G1　0	3.33	0.17	3.16	0.05	Os 類似
	〃　1b	12.74	6.04	6.70	0.90	Os?
	〃　2	12.74	1.62	11.12	0.15	Kgp?
	〃　3	7.27	0.96	6.31	0.15	Kgp 類似
	第2調査区　1	20.47	0.78	19.69	0.04	Os 類似
	3	21.98	10.52	10.45	1.01	Os?
	4	24.96	3.15	21.83	0.14	Kgp?
長崎新田遺跡	G1　1	49.36	2.68	46.68	0.06	Os 類似
	〃　2	38.03	19.91	28.12	0.71	Os?
	〃　3	39.83	6.43	33.40	0.19	Kgp?
	G5　10	39.46	0.77	38.69	0.02	Os 類似
	〃　11	36.24	15.33	20.91	0.76	Os?
	〃　12	42.55	6.35	36.20	0.18	Kgp?

この表で、Os?、Kgp? とした試料のCS/FSは前者で1〜0.7、後者で0.14〜0.19の範囲に収まる。Os? 類似とした試料はCS/FSが0.06〜0.02ときわめて小さく、上記イ、ロの観察と一致する。

(b) 粗砂の実体顕微鏡観察

1) Kgp? 試料　いずれも、白色の軽石粒と透明な長石(無色)、しそ輝石(飴色)、黒い角閃石からなる。後の3者の表面は軽石物質(無色透明の火山ガラス)で包まれ、でこぼこしている。

2) Os? とOs類似試料　両者とも、黒色多孔質のスコリア粒子と白色粒子からなるが、白色粒子はOs? で不〜半透明なものが、Os類似で透明なものが、それぞれ、多いことと、赤色粒子はOs? にあり、Os類似にないことが注目される。

(c) 細砂の偏光顕微鏡観察

1) Kgp?　いずれも、圧倒的な量の火山ガラス(70〜80%)、斜長石(15〜20%)角閃石、しそ輝石(数%)を主成分とする。後の3鉱物は火山ガラスを表面に付着するものが極めて多い。また、火山ガラスは、気泡が細長くのびた繊維型が、丸い気泡の多孔型よりも多く、しかも、両者の比は、各試料とも、1.4〜1.2と揃っている。なお、G1のKgp? 類似の黄灰色火山砂(ニ)は粒径、鉱物組成、ともにKgp? 試料のそれと似ている(表2)。

表2　Kgpの鉱物組成(細砂画分、粒数%)

注) +は1%以下を示す

遺跡		石川遺跡			長崎新田遺跡		下野遺跡B
区、グリッド		G1		2区	G1	G5	南壁
試料名		2	3	4	3	12	火山灰
斜長石		14	26	21	14	13	19
角閃石		2	3	5	2	2	1
しそ輝石		2	4	2	1	2	+
不透明鉄鉱物		+	1	+	0	0	0
他		0	0	+	+	+	0
火山ガラス	偏平型	9	4	7	9	4	8
	多孔型	28	22	23	27	30	26
	繊維型	33	29	28	36	41	43
	汚濁型	9	5	7	8	7	5
	角型	3	4	5	2	2	5
繊維型/多孔型		1.21	1.32	1.24	1.36	1.36	1.68

2）Os?、Os?類似　各試料とも、多量のスコリア粒と斜長石からなる。後者にはスコリア物質（黒色ガラス？）で表面の一部を覆われるものも多い。（表2に示してない）

(d) 結論　以上の検討から、次のような結論をうることができる。

① Kgp?試料の粒径、鉱物組成は、石川、長崎新田の両遺跡とも互いによくにており、かつ、これまでに静岡清水平野で発見されたもの（登呂、富士見小、有東、汐入、下野Bなどの諸遺跡）とも同じ性状をもち、多くのものが大沢スコリア（Os）とおもわれる褐色火山砂の下、10 cm以内に現われることから、同一の火山灰（伊豆天城のカワゴ平軽石〈Kgp〉）とみてよいであろう。なお、石川遺跡G1のKgp?類似の火山灰は、今のところ、他所では見付かっていないので、将来の検討課題とすることとする。

② Os?試料は、いずれも、スコリア粒子を主とすること、Kgpの直上に来ることから、富士火山起源で南西方向に噴出した大沢スコリアと同定されよう。ただ、今回、石川、長崎新田遺跡で、本層の上に類似のスコリア火山砂層（Os?類似）が出現したことは新しい事実である。これはOs?試料とは違う特徴を持つことがわかった。噴出源は恐らく富士火山であろうが、山麓のどの火山灰と対比できるかは、今後の問題である。なお、これまでに静岡清水平野で発見されたもの（富士見小、神明原、元宮川、川合遺跡）はすべて、本遺跡のOs?試料と同タイプである。

（3）年代的考証

Kgp、Osの14C年代、考古学的遺物との関係については、既に、下野B遺跡の報告（加藤、1985）で述べたので個々では繰返さない。

あのときの例証は、すべて、県東部のものだったが、その後、静岡地区でも新事実が発見されているので、以下、これを紹介することとする。

神明原・元宮川遺跡で、低地堆積土層とされた土層の泥炭層の上部にOs火山灰があり、同層の下部から縄文後期の遺物が出土し、泥炭層の14C年代が3550±120年BP、2820±100年BP（縄文後期～晩期）であった（神明原・元宮川遺跡調査概報、1986）。

これらはOsの推定年代、約2700年BPと整合性がある。

文　　献

加藤芳朗（1985）清水市下野遺跡（B地区）の遺物包含層をめぐる地質学的検討。

『下野遺跡』　152－156頁、清水市教育委員会

加藤芳朗（1986）押切石川遺跡の土層の地質学的検討。

『宮平I遺跡・石川遺跡発掘調査略報』　20－21頁、清水市教育委員会。

静岡県埋文調査研究所（1986）

『神明原・元宮川遺跡、大谷川放水路建設に伴う発掘調査概報』　10頁。

図版第１

A　石川遺跡近景

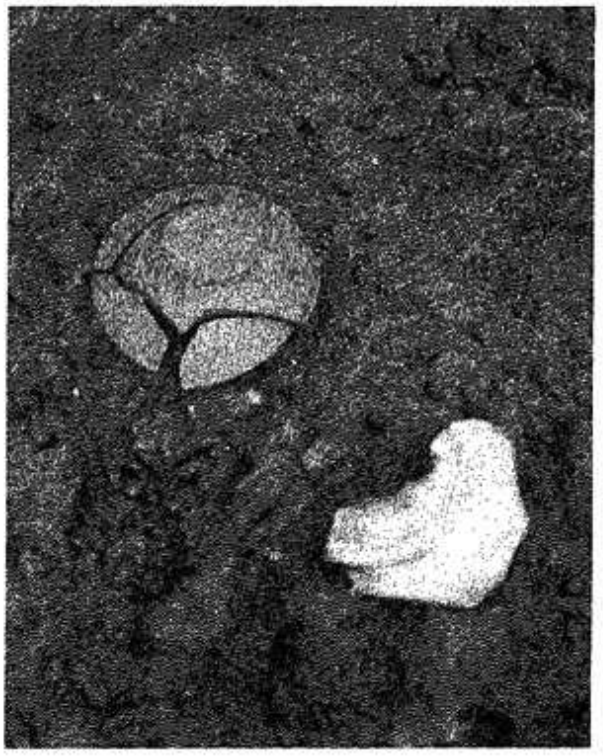
B　石川遺跡第１地区

図版第２

A　石川遺跡第２地区

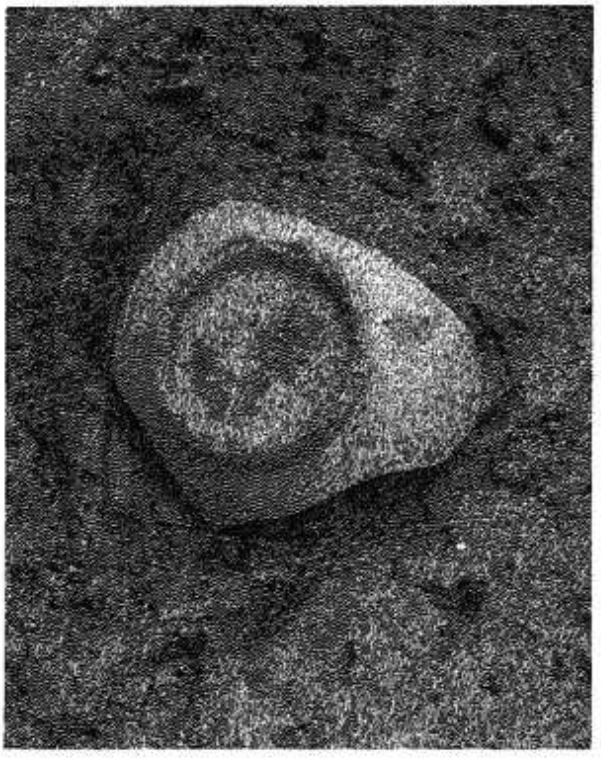
B　土器出土状態

図版第3



A　土器出土状態

B　土器出土状態



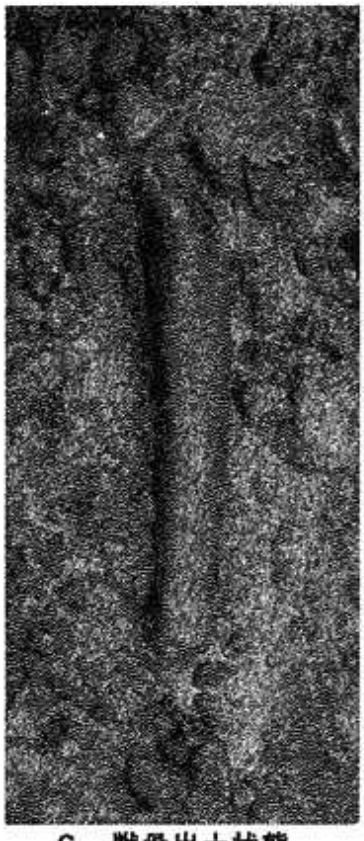
C　土器出土状態

D　土器出土状態

図版第4

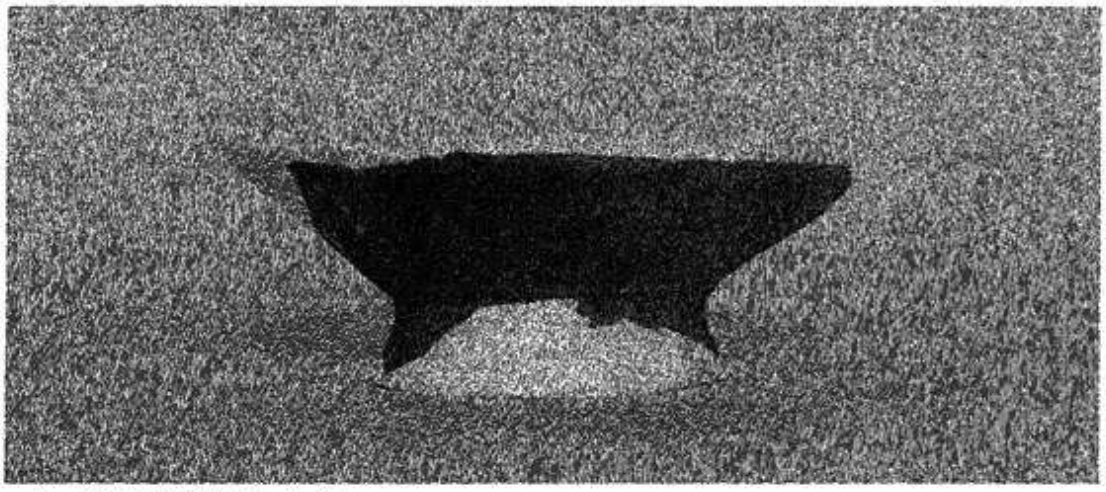
A　イヌ頭蓋骨出土状態

B　獣骨出土状態

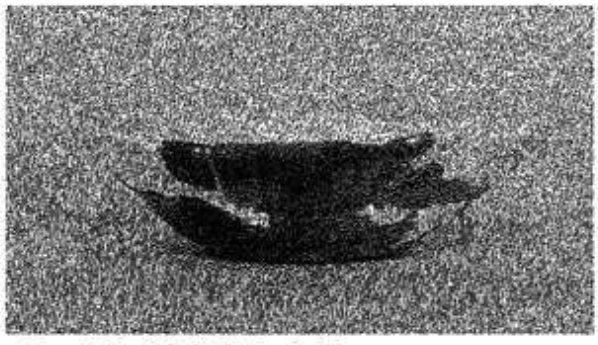


C　獣骨出土状態

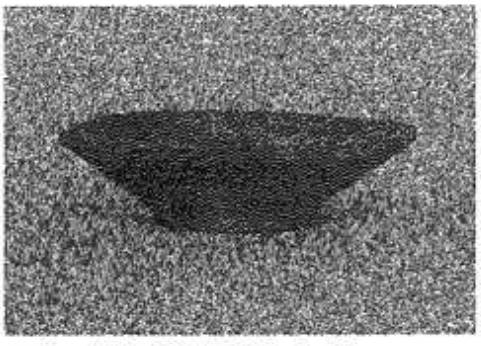
図版第５



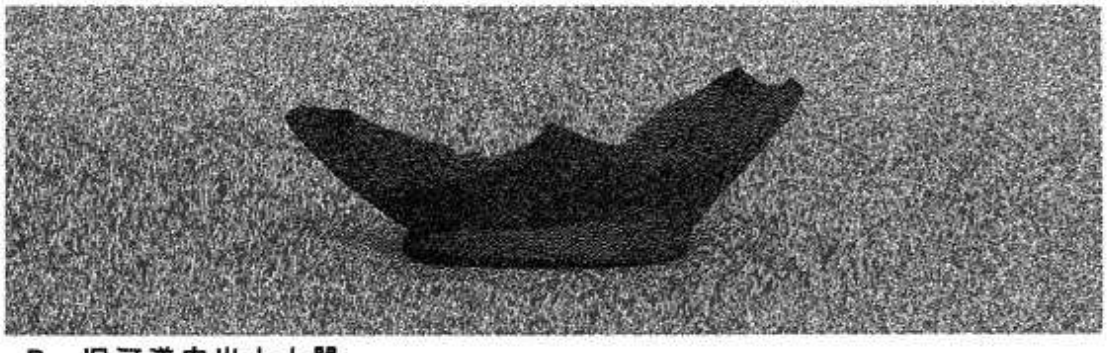
A　旧河道内出土土器



B　旧河道内出土土器



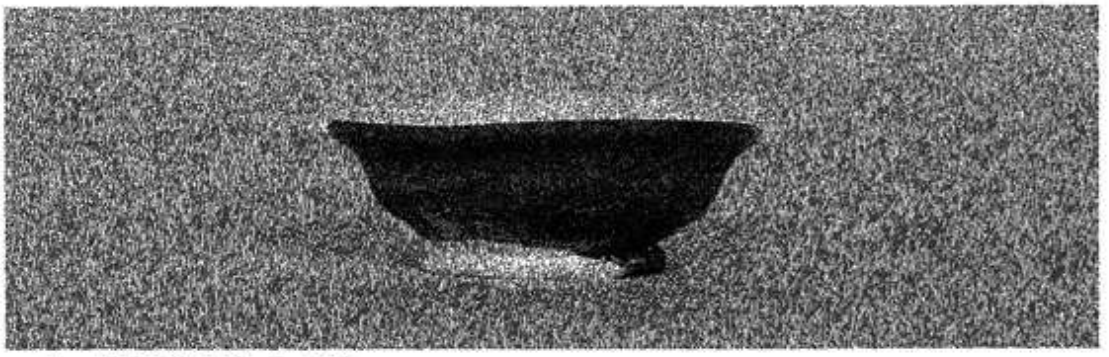
C　旧河道内出土土器



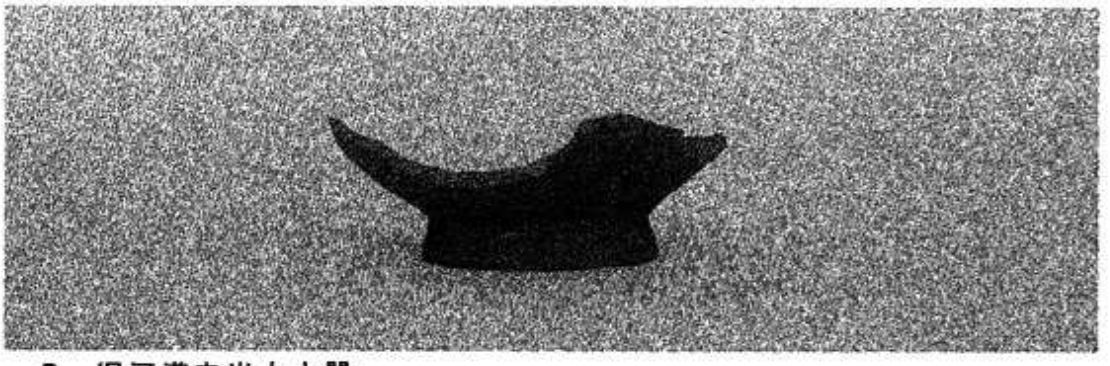
D　旧河道内出土土器

E　旧河道内出土土器

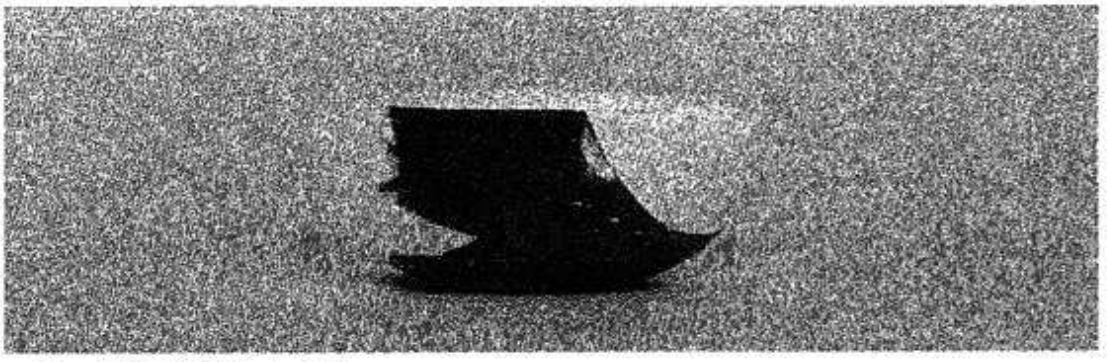
図版第6



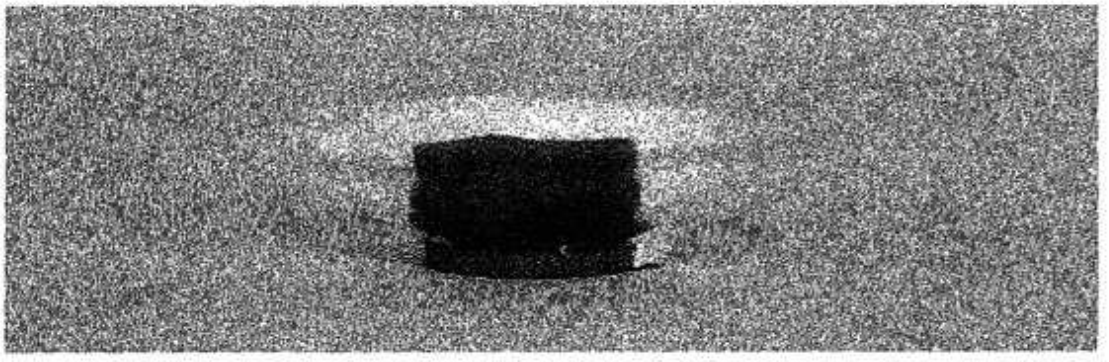
A　旧河道内出土土器



B　旧河道内出土土器

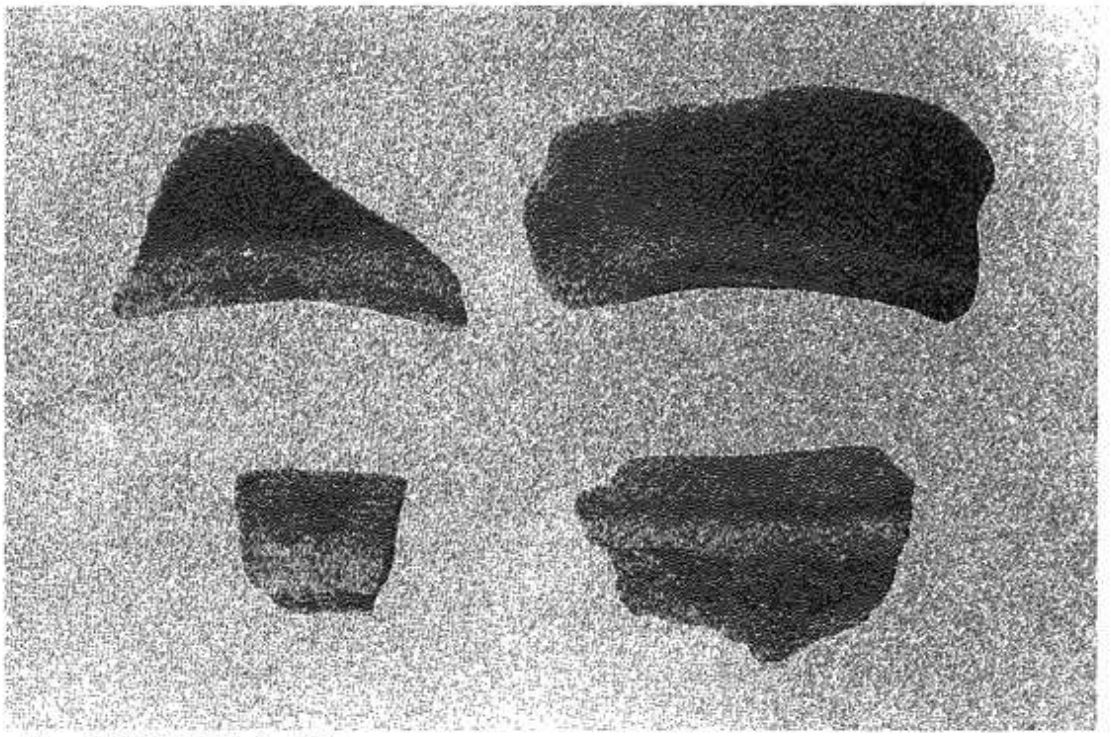


C　旧河道内出土土器

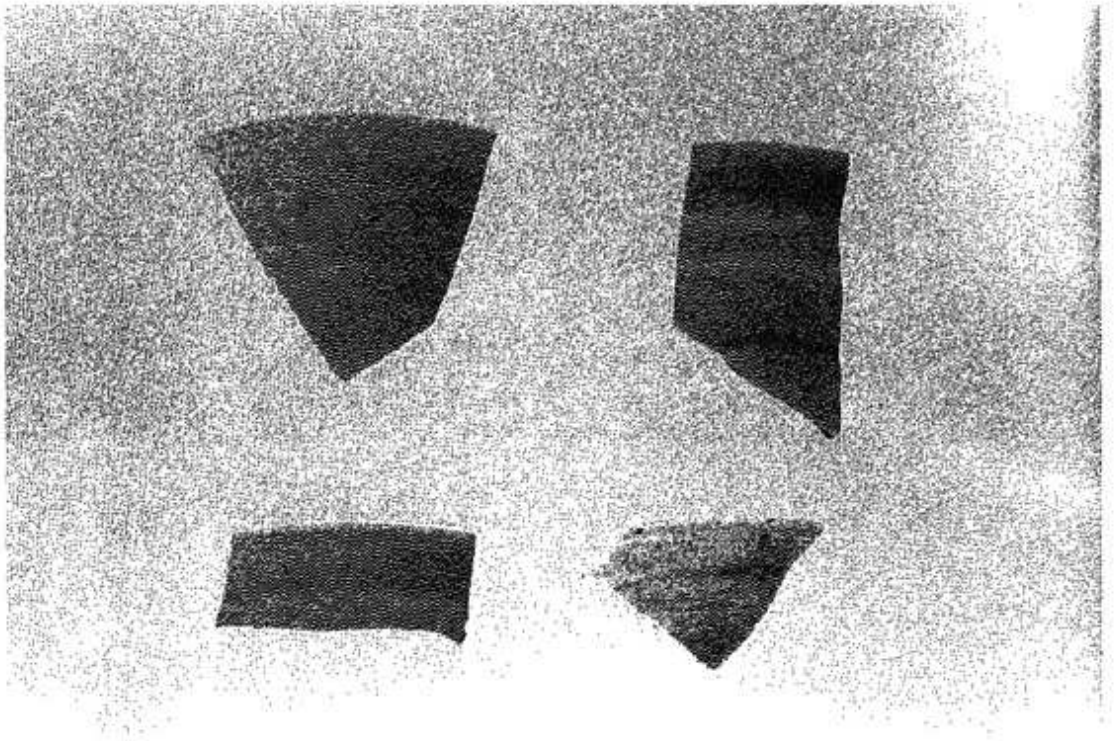


D　旧河道内出土土器

図版第７

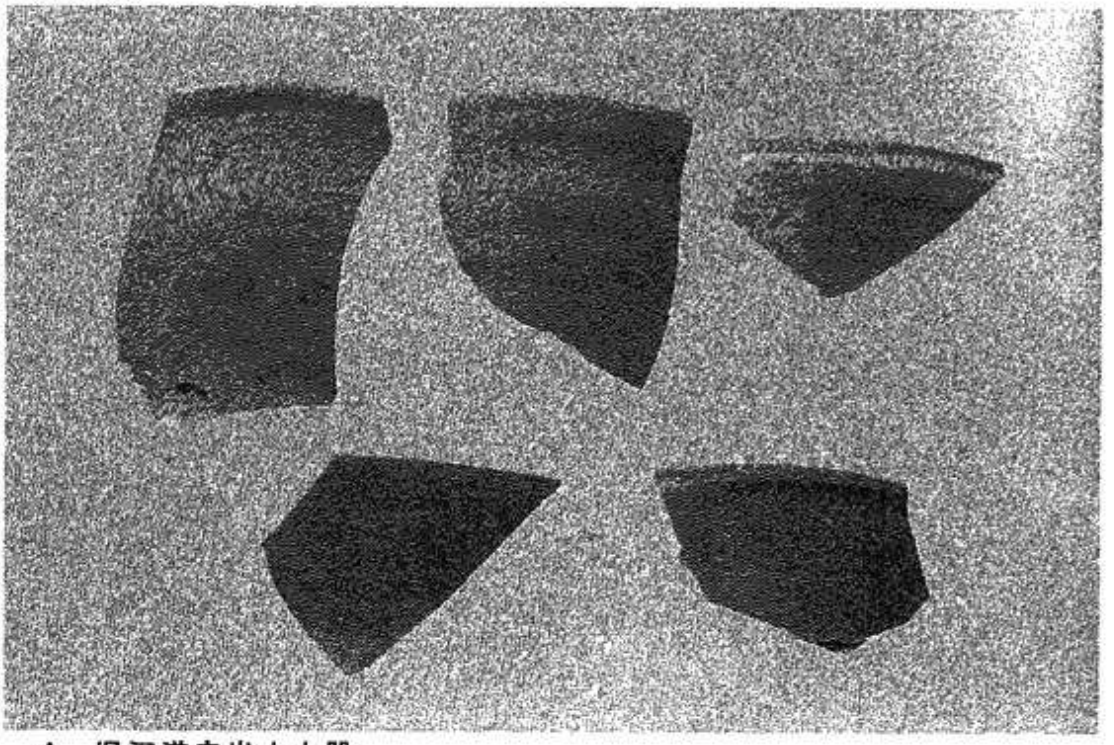


A　旧河道内出土土器

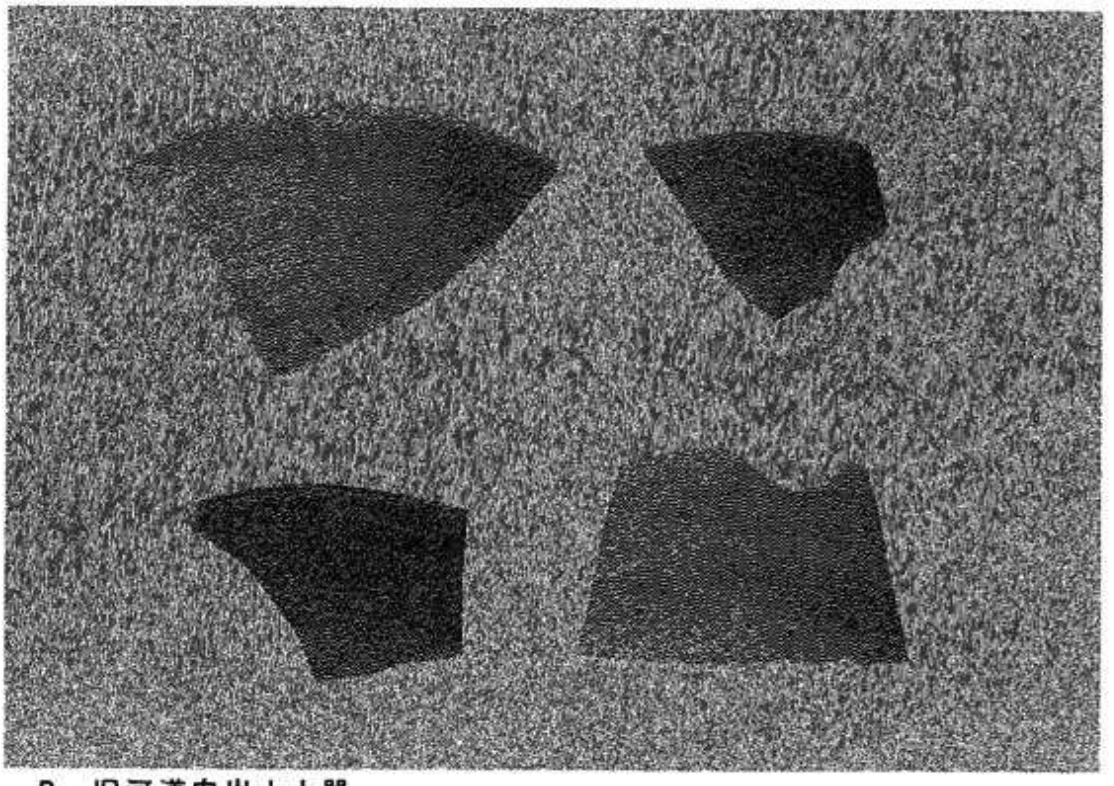


B　旧河道内出土土器

図版第８

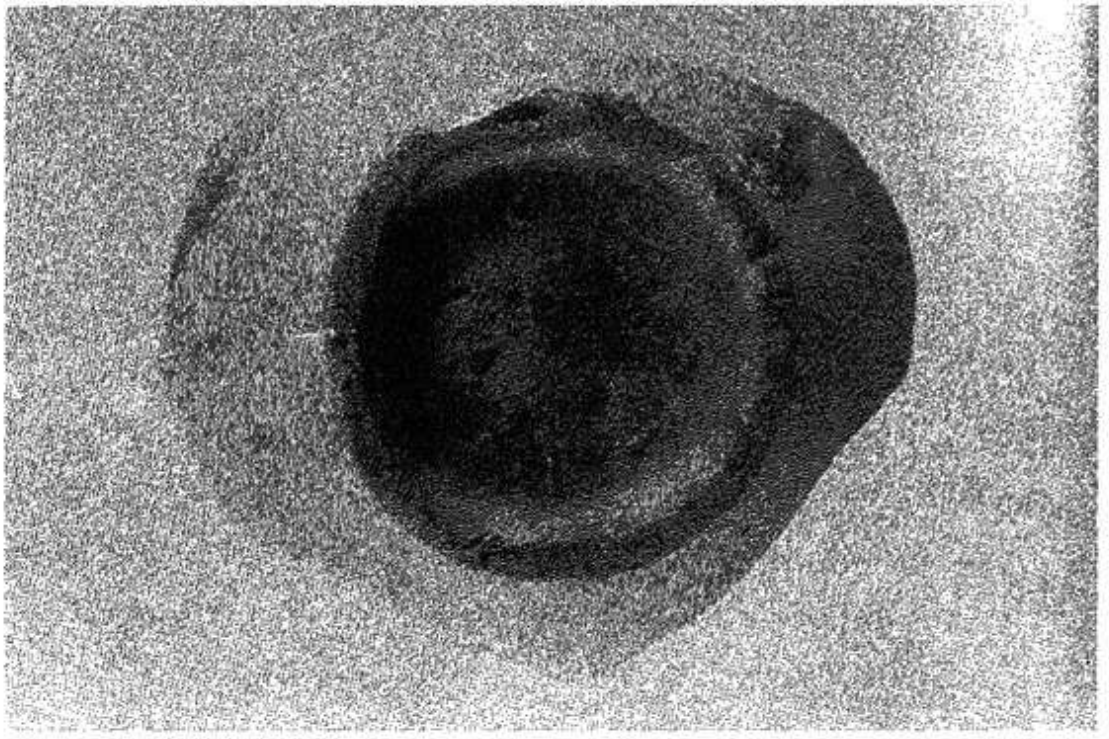


A　旧河道内出土土器

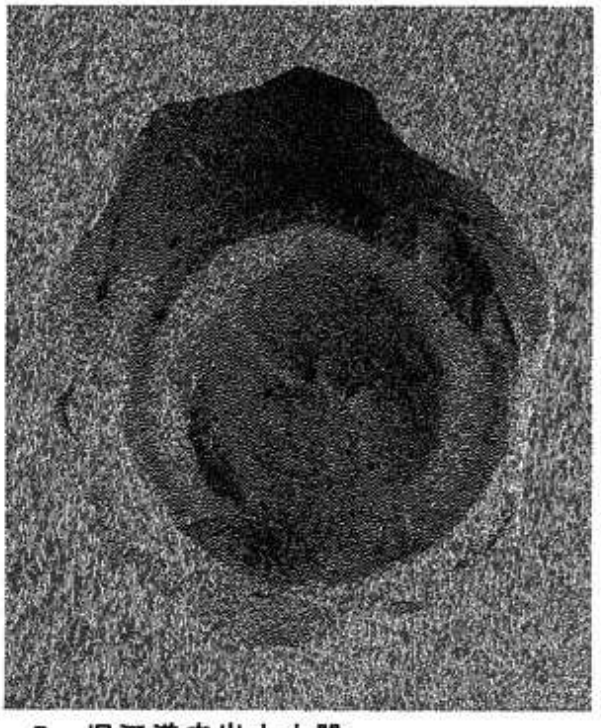


B　旧河道内出土土器

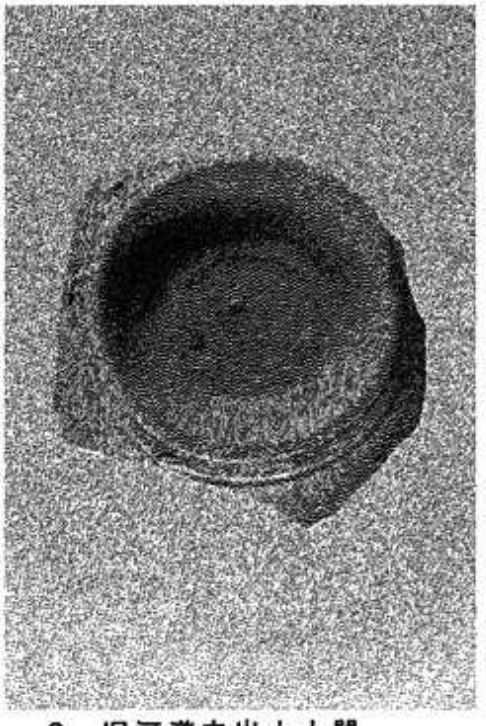
図版第９



A　旧河道内出土土器

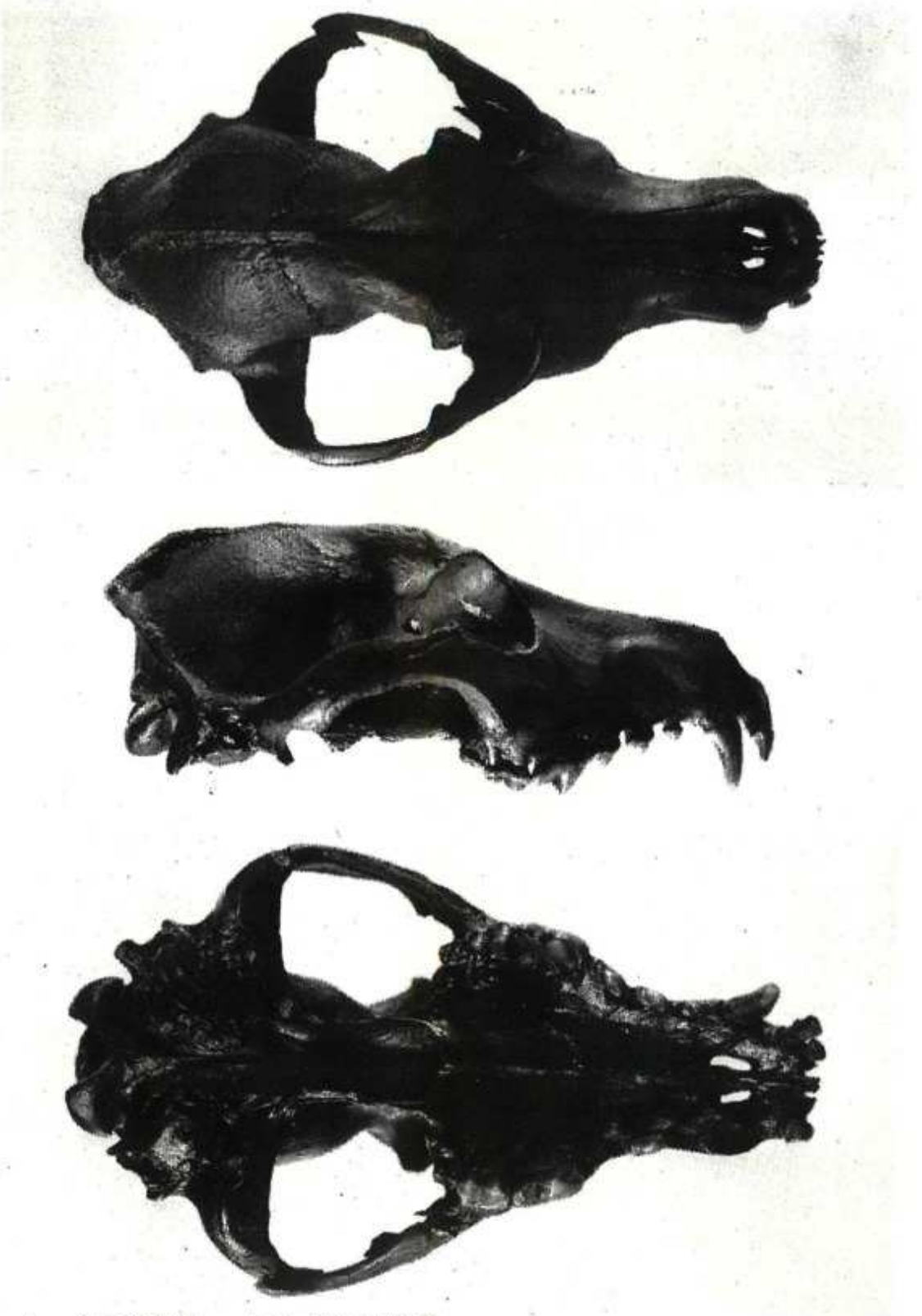


B　旧河道内出土土器



C　旧河道内出土土器

図版第10



A　イヌ頭蓋骨　上面、側面頭蓋底

石　川　遺　跡

昭和61年度押切南地点発掘概報

昭和62年3月31日

編　集　清水市教育委員会
発　行　清水市教育委員会
印刷所　サイトー印刷KK